

清華簡伊尹文獻に関する研究

横山, 慎悟

<https://hdl.handle.net/2324/7329397>

出版情報 : Kyushu University, 2024, 博士 (文学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (4)



氏 名 : 横山 慎悟

論文名 : 清華簡伊尹文献に関する研究

区 分 : 甲

論文内容の要旨

本稿は、中国の清華大学が2010年から公開を開始した「清華大学蔵戦国竹簡（清華簡）」に含まれる、伝説上の賢人・伊尹にまつわる五種類の説話文献（『尹至』『尹誥』『赤鳩之集湯之屋』『湯在啻門』『湯處於湯丘』）を主な対象として、それらの文化史上における位置の検討を目指すものである。

清華簡については、

- ①入手経路に不明瞭な部分の多い所謂「非発掘簡」であること
- ②抄写地点と目される戦国期長江中流域が、様々な地域由来の文化の入り乱れる状況にあったこと
- ③今後も新資料が続々と発見・公開される可能性の高いこと

といった問題が指摘される。序章では、文献の検討を開始する前に、以上の諸問題について概述し、それとともに、本稿にて行う検討が日進月歩で進む新出土資料の研究における標石に類する性格のものであることを明記した。

本来殷代の神格であった伊尹は、春秋期以降、学術・思想の伝播を目指す多くの勢力・学派によって様々なイメージを付与されたものと考えられる。第一章「伊尹伝承の類型」では、春秋戦国期の伊尹説話に描かれた伊尹の出自や性格を複数の類型に整理した。その上で第二～四章では、各種イメージが戦国期の思想や信仰、そして五篇の伊尹文献と如何なる関わりを持つかについて検討し、清華簡伊尹文献に描かれる伊尹の人物像が他文献に見えるものと一定の関連性を有し得るものであることを確認した。

第二章「儒家文献と伊尹」では、古代儒家思想と伊尹伝説との関わりについて考えた。儒家の重要文献である『孟子』は、君命でなく自らの判断に基づいて民衆を導く「先覚者」として伊尹を描き、彼に理想的士人の形を仮託する。また戦国期の伝世文献・出土文献のいくつかも、君命に代わる臣下の自立行動に係る行動基準として民衆を挙げ、清華簡伊尹文献の多くもまた民衆の救済を強調する。特に、民衆の反応を為政の是非と結びつける『尹至』『尹誥』の記述は、君主の利益を臣下の行動規範とする旧来の思考様式が『孟子』型の思考様式へと移行する一過程と目される。その点で伊尹伝説は、「新たな士人の倫理」としての儒家思想が発展する過程と強い結びつきがあったものと想像される。

第三章「伊尹と宗教文化」では、様々な巫術・呪術の要素を鍵として展開する『赤鳩』説話に注目し、伊尹伝説の展開と信仰文化との関係について考えた。本章では、『赤鳩』説話に見える思考様式が自然信仰の要素を含みながら、『易』や『楚辞』等にも窺える「強大な自然や神格を克服・利用せんとする思考」を含むものでもあることに注目し、『赤鳩』の思想史上の価値について考えた。霊鳥の力によって段階的に超常能力を身につけて活躍する『赤鳩』の伊尹は、神格や自然を権威の背景とする術者としての顔を持ちながら、上帝に対抗し、人間の便宜を勝ち取ろうとする賢人としても描かれる。このような伊尹の姿は、巫術信仰の色濃い楚地にて、自然や神格からの自立を強調する「天人の分」思想が展開した経緯を推し測る鍵となり得る。

第四章「伊尹と身体認識にまつわる思想」においては、『赤鳩』『湯處於湯丘』に描かれる料理描写・『湯在啻門』の伊尹が説く身体生成の過程に注目し、三文献の身体認識や医術思想における位置について検討した。まず、『赤鳩』『湯處於湯丘』に描かれる、心身に神秘的な健康作用を及ぼす性質を持つ料理に係る描写は、第三章で検討したような伊尹の神秘性を向上させる効果を有していた点で楚地の習俗を探る糸口になると同時に、呪術医療と実証医療の併用される状況を示すものと考えられる。また、『湯在啻門』には、「気」や「脈（篇中では「糾」と表記される）」のような古代中国の身体認識における重要な事柄が登場し、従来の文献に係る知見だけでは説明し得なかった戦国時代中頃の医術認識の一端を明らかにする。そしてこれらの要素を付与された伊尹という賢人の人物形象は、古代中国の名医・扁鵲のそれとの類似点をいくつか指摘できるものであり、同時に先秦中国の薬品に係る思考の淵源を示すものであった。ゆえに伊尹の伝承は、医術の展開について探る上で重視されるべきものと判断される。

そして結論ではここまで考えた事柄を踏まえ、各伊尹文献から多種の文化事項に係る新知見を見出すことができること、そして多くの文化事項を集約させ、さらに新たな形式へと変化させた伊尹に文化の伝播における特異点としての意味合いも指摘できることの二点を確認した。その上で、思想史や宗教史、医術史等多くの領域と交わる伊尹伝説がより多くの分野に基づく検討を求めること・太公望・黄帝・禹等他の人物の伝説との十分な比較検討が行えなかった等の課題を示し、本稿の扱ったテーマがさらなる展開を期待し得るものであることを指摘した。